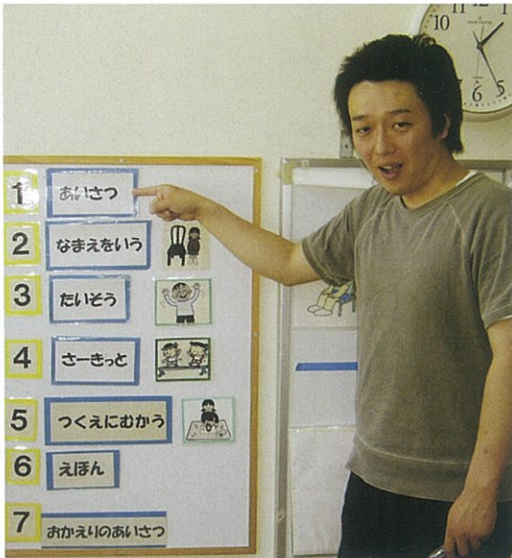


修了生  
からのお便り



齊藤 勇紀 (さいとう ゆうき)  
新潟県出身。上越教育大学大学院障害児教育専攻を平成14年に修了。現在、上越市子ども発達支援センターに勤務している。

## ここから始まる 特別支援(自立活動)



私は、立正大学の社会福祉学部を卒業し、上越教育大学大学院修士課程障害児教育専攻を平成14年に修了しました。現在は、教員としてではなく、就学前の子どもさんの支援の場である上越市子ども発達支援センターに勤務しています。

子どもの発達や心の問題は、今やとても関心の高い問題となっています。発達障害、ADHD、いじめ、虐待、不登校、拒食症などの話題が、毎日の新聞に載らない日はありません。私は、学部時代に発達障害のある子どもたちの姿、また、発達障害のある子どもにかかわる専門職(保育園の保育士や幼稚園の教諭)の方々の姿をみて、特に自閉症のお子さんの発達支援にかかわりたいと強く感じるようになりました。修士課程では、保育の場面で子どもが主体的に活動に参加すること、また、発達の促進をテーマに研究を進めました。障害児教育実践センター(現在は特別支援教育実践研究センター)での臨床活動では、子どもの行動の見取りを細部までアセスメントすることの重要性を学びました。機能分析という方法



新版K式発達検査2001による発達検査。子どもの発達や特性を観察し、適切な支援につなぎます。

で、子どもの行動の機能や、発達について査定し、身につけたい技能や周囲への支援の方法を検討することに没頭しました。また、それだけでなく、他の研究室の先生方からも、個別指導計画作成に関するスキルや子どもの発達、認知特性に応じた支援のあり方を学びました。修士課程では、主に子どもに対するアプローチ

チについての研究を行っていましたが、現場に出ると、子どもとご家族、支援する専門職とのかわりの中で、子どもの発達促進には、子どもへのアプローチだけでなく、かわる人すべてへのアプローチが必要であることを理解していくこととなりました。

発達障害の子どもの療育・教育は、風邪のような身体疾患に対応するときの「治療」の考え方で行うものではありません。発達障害のある子どもへの対応の基本は、個々の子どもの特徴、生まれつきもっている独特の凹凸との上手な共存と考え、子どもとかわる方々の、子どもも理解、特性の理解を発達相談を進めています。

発達相談では、保護者の方の主訴の聞き取り、発達検査などから全体的な発達状況や認知特性、今後の発達の道筋を推定します。子どもの



子どもにあった様々な教材を用いて、個別指導を行っています。

ことが自立活動の目標となりますが、就学後からだけでなく、就学前から自立活動を中核とした支援を今後も行っていきたいと思えます。

特性や発達の道筋を見ていくことは、子どもにかかわる周囲の方々への支援にもなりません。全体的なアセスメントの結果から療育の必要性や、保育園、幼稚園への支援、就学相談や就学後の支援などを検討することとなります。最近では、就学した児童の保護者からの相談も増えています。早期に診断を受け、子どもの特性を知ったりした保護者の子どもは、就学後も比較的落ち着いた学校生活を送っているとの声が教員や保護者から聞かれるようになってきました。

私は、就学前の子どもと保護者を対象として大学での研究を生かしながら支援を続けています。私の大学院の同期のほとんどは、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室などで児童生徒の教育に携わっています。日々の実践や教育・療育についての悩みや今後の見直しなどについては、大学院生活を通じて出会えた先生方や仲間とともに設立した研究会で情報交換をしています。障害のある子どもへの教育では、自立活動の指導が教育課程の重要な位置を占めています。子どもが主体的、積極的に活動することを通して自立を目指すことが自立活動の